

《記録》

二〇〇五年 日本政教研究所 秋期シンポジウム

『皇位継承をめぐって』講演者レジュメ



嵐 義 人

國學院大學 教授

編著・論文

「譯註日本律令（律本文篇）」上下（東京堂出版）一九七五年

「順徳院に関する若干の覚書」「順徳天皇とその周辺」（臨川書店）一九九二年

「古記の成立と神祇令集解」など『令集解私記の研究』（汲古書院）一九九七年

「古代比較文化史の問題」「比較民俗学のために」（二〇〇一年）
「律令注釈書・政書類における『古事記』引用についての一考察」（『古事記受容史』（笠間書院）二〇〇三年）

「酒式と酒令をめぐって」（『アジア文化』二六）二〇〇三年

『令集解』に見える「興大夫」について『政教研紀要』二六（国士舘大学日本政教研究所）二〇〇四年

その他

古事記学会、日本古文書学会、延喜式研究会

略 歴

一九四四年 新潟県生まれ

一九七六年 國學院大學大学院文學研究科博士課程満期退学

一九七六年 國學院大學日本文化研究所助手

一九八一年 文部省初等中等教育局教科書調査官

二〇〇五年 國學院大學神道文化学部教授

専攻領域 律令学・考証史学・文化史

テーマ「古代皇統における四世孫・

五世孫と源平藤橘」

古代制度史における常識が、現代に生きる教養ある社会的リーダーのなかに、ともすれば誤解された形で認識されていることがある。万に一つでもそのようなことのないように、わが国古代制度史の常識ともいふべき諸点を簡単に述べることが、私に課せられた課題と考えている。

勿論、元来が怠け者で、殊に人様の前で、口頭にせよ、論文にせよ、発表することすら避けてきた私に、十分な話ができるとは思えないが、一つだけは伝えておきたいと考えている。

それは、皇位継承における歴代天皇との世代数であり、そこに内在する天皇霊継承の意味である。

そこで、『日本書紀』に書かれた皇統の記述のみを基に（資料用・書紀所見皇統譜）を作成し、そこから、父子・兄弟継承以外の歴代天皇との世代数を読み取り、女帝も同様にある範囲内の世代数で繋がっていることなどを確認することとした。

ついで、時間があれば皇后の問題にも触れ、光明皇后以後の制度の変容の中での「源平藤橘」の問題などにも言及したいと考えている。

なお、司会者・発表者の中に、私以上にこの問題に精通している方がおられるので、その方々からのコメントや、会場

からの発言などにより、現在私が若干懐いている疑問が解消できればありがたいと、密かに期待している。



高橋 紘

静岡福祉大学 教授
皇室研究家

略歴

一九四一年 東京都生まれ

一九六五年 早稲田大学第一法学部卒業

共同通信社入社。社会部長、仙台支社長、（株）東京MXテレビ（東京メトロポリタンテレビ）報道局長（出向）、共同通信ラジオ・テレビ局長、（株）共同通信社取締役・事業本部長などを経て現職。

一九七五年

昭和天皇の「在位五〇年」や「ご訪米」のころ、二年半、宮内記者会に在籍。昭和天皇の崩御、皇太子結婚などデスク、社会部長として携わった。この間、名古屋大学、立教大学、東京経済大学各講師。衆議院憲法調査会、首相の私的諮問会議「皇室典範に関する有識者会議」で参考

人として、象徴天皇、皇位継承問題について意見を求められた。皇室問題についてテレビ、新聞、週刊誌、雑誌などのメディアで意見を述べている。

著書・編著

『現代天皇家の研究』（講談社）

『象徴天皇』（岩波新書）

『象徴天皇と皇室―日本国憲法・検一九四五―二〇〇〇』（小学館文庫）

『皇位継承』（所功氏と共著、文春新書）

『平成の天皇と皇室』（文春新書）

編集解説

『側近日誌』（文藝春秋社）

『河井弥八日記―昭和初期の天皇と宮中』（共編、解説。全六巻、岩波新書）

監訳

ケネス・ルオフ著『国民の天皇』（共同通信社、朝日新聞大佛次郎賞）

テーマ「女性天皇の容認を」

皇位継承の条件は、「国民に広く支持されること」と「将来

とも安定的な継承方式かどうか」であろう。これを満たすには、私としては「女性天皇に道を開き、継承順位は長子（第一子）優先」という結論になる。

まず女性天皇容認である。千数百年続いた男系男子の継承から女系に移ることは、歴史的な大転換であり、十分論議を尽くさなければならぬ。しかし現皇族の中で秋篠宮の後に男子がなく、やむを得ない選択といえる。「皇統に属する」男子は、戦後皇籍を離れた一一宮家の末裔に何人かいるが、その中から天皇家に迎えれば、過去の伝統は維持できるという意見がある。しかし、離脱した理由はあるの当時で約五五〇年前に天皇家から分かれた伏見宮の一統だったからだ。「親等の距離」が基準とされたのである。

いまの天皇家と親等の遠く離れた人を、戦後六〇年も経ってから、皇族として迎えることに支持があるだろうか。今年三月の日本世論調査会の調査では、女性天皇を可とする人は八一・三％に上る。この数字は無視できない。国民感情としては直系に愛子内親王がいるのに、なぜ「血筋の遠い」人を皇統に入れる必要があるのか、ということにならないか。

「長子優先」か「男子優先、女子も可」の問題だが、後者だと後になって男子が誕生すれば、その人に代わる。この方式では継承順位の決定が遅れたり、順位に変更が起きたりする。直系に女子がいても、遠系に男子が生まれれば皇位は移ってしまう。

新旧両典範とも継承の原則を、直系・長系・最近親とするが、長子優先なら生まれて直ぐから「この方が将来の天皇」

と明確で、国民にも親近感が生まれよう。男子にこだわる理由はない。女子でも国事行為や宮中祭祀に問題はない。「男系男子」は日本の伝統だが、象徴天皇にふさわしい皇位継承は、それに固執することだろうか。シンポジウムで各位との論議を深めたい。



百地 章

日本大学 教授

略 歴

一九四六年 静岡県生まれ
一九七〇年 京都大学大学院法学研究科修士課程修了
一九八三年 西ドイツ・フライブルク大学留学（一九八四年八月まで）
一九八五年 愛媛大学法文学部教授
一九九三年 京都大学博士（法学）
一九九四年 日本大学法学部教授

著 書

G・ライプホルツ『現代民主主義の構造問題』（阿部照哉ほか、共訳）木鐸社 一九七四年

『憲法Ⅰ総論・統治機構』（佐藤幸治ほか、共著）成文堂 一九八六年

『国家と宗教の間』（大原康男ほか、共著）日本教文社 一九八九年

『憲法と政教分離』成文堂 一九九一年

『政教分離とは何か―争点の解明』成文堂 一九九七年

『永住外国人の参政権問題Q and A』自費出版 二〇〇〇年

『新憲法のすすめ―日本再生のために』（大原康男ほか、共著）明成社 二〇〇〇年

『「国家」を見失った日本人』（田久保忠衛編、共著）小学館文庫 二〇〇一年

『新教育基本法 六つの提言』（西澤潤一編著、共著）小学館文庫 二〇〇一年

『靖国と憲法』成文堂 二〇〇三年

『伊勢神宮と公民宗教』伊勢神宮崇敬会叢書八 二〇〇五年

『憲法の常識 常識の憲法』文春新書 二〇〇五年など

その他

現在、比較憲法学会常任理事、民間憲法臨調・事務局長など

テーマ「急務は男系維持のための宮家整備

―憲法学の立場から―

「皇室典範に関する有識者会議」は、現在、女性天皇容認

の方向で報告書を取りまとめようとしている。

確かに、過去において、推古天皇や持統天皇など一〇代八方の女性天皇がおられたことは周知のとおりである。しかしながら、これらの女性天皇はあくまで一時的、例外的なものであって、男系男子の天皇に皇位を継承させるための暫定的な手段にとどまっていたことを忘れるべきではない。

これに対し、秋篠宮殿下より年少の男子の皇位継承者が存在しない現状において女性天皇を容認することは、女系天皇の容認に繋がる。これはわが皇室における男系男子による皇位継承の伝統を否定するものであって、賛成できない。有識者会議では、世論を尊重するというが、女性天皇に賛成している国民の多くは、女性天皇と女系天皇の違いさえ正しく認識していないのではないか。

それに、報告書の取りまとめ方として、女系天皇を容認した場合、最も困難であり、多くの難問を抱えている皇婿殿下（プリンス・コンソート）つまり女帝の夫となられる方をどこからどのようにして迎えるのかといった問題に明快な回答や指針を示すことなく結論を急ぐことは、無責任といえよう。

それゆえ、急ぐべきは、皇位の安定的継承のため、危機にある宮家の存続と拡大をはかることである。そのためには、旧皇族男子による養子が可能となるよう速やかに皇室典範を改正する必要がある。また、旧皇族の皇籍復帰なども視野に入れて検討すべきであろう。幸い、GHQによって強制的に廃止された旧一宮家のうち、久邇宮家、東久邇宮家それに竹田宮家には適齢の独身男子の継承者がおられることから、それらの方々による宮家への養子や内親王、女王との縁組に

よる旧宮家再興の可能性は十分現実味があると思われる。これによって、男系男子継承の伝統維持は可能となる。

他方、女系天皇の容認は万やむを得ない場合の選択肢であるから、さらに時間をかけて、慎重の上にも慎重に検討すべきである。皇太子ご一家および秋篠宮家とも、まだ親王ご誕生の可能性があり、養子制度の採用によって常陸宮家、三笠宮寛仁親王家、桂宮家、さらに高円宮家を旧皇族男子が継承したり、旧皇族が皇籍に復帰したりすることになれば、男子誕生の可能性は増大する。したがって、伝統否定に繋がる女系天皇の容認については、決して結論を急ぐべきではない。



所 功

京都産業大学 教授

略 歴

一九四一年 岐阜県生まれ

一九六六年 名古屋大学大学院修士課程（国史学専攻）皇學館大学助教授・文部省教科書調査官を経て

一九八一年 京都産業大学（教養部→法学部兼日本文化研究所）

一九八六年 法学博士（慶應大学、日本法制文化史）

著書

研究書

『三善清行』(吉川弘文館・人物叢書)

『菅原道直の実像』(臨川書店)

『平安朝儀式書成立史の研究』『宮廷儀式書成立史の再検討』

(国書刊行会)

『年号の歴史―元号制度の史的研究―』(雄山閣出版)

一般書

『伊勢の神宮』(新人物往来社・『伊勢神宮』講談社学術文庫)

『京都の三大祭』(角川選書)

『皇位継承』(共著、文春新書)

『天皇の人生儀礼』(小学館文庫)

『皇室の伝統と日本文化』(モラロジー研究所)

『近現代の「女性天皇」論』(展転社新書)

『日本の年号』(雄山閣出版)

『日本歴史再考』(講談社学術文庫)

『国旗・国歌の常識』(東京堂出版)

『国旗・国歌と日本の教育』(モラロジー研究所)

『靖国の祈り遥かに』(神社新報社)

『ようこそ靖国神社へ』(近代出版社) など

校注書

『三代御記逸文集成』『撰集秘記』(国書刊行会)

『西宮記』『北山抄』(神道大系編纂会)

『新訂 建武年中行事』『新訂 官職要解』(講談社学術文庫) など

テーマ 「皇位の男系継承史と

女系容認論の検証」

一、現行の憲法にも「世襲」と明示される「皇位」が、千数百年以上にわたって「男系の皇族」により継承されてきた史実のもつ意味は、確かに大きい。

二、ただ、その半数近くが「側室所生の庶子継承」であり、時には独身の女帝による中継ぎや遠縁男子への傍系継承なども臨機応変に行われてきた。

三、しかし、戦後の皇室典範が側室・庶子を否定したのは切実な変革であり、それでも従来どおり継承者を「男系の男子」に限定しているのは無理な規制である。

四、さて、「皇位」の特質を端的に申せば、それを祖宗以来の「皇統に属する皇族」在籍の方々のみが継承され、一般国民が絶対覬覦(きゆう)しないことである。

五、しかも、その皇位は、可能な限り「直系・長系の皇族」に継承されることが望ましく、それには該当する方々が確実に存在しなければならない。

六、そこで、制度を改めるとすれば、皇位継承の資格を皇統に属する皇族の男子だけでなく女子にも広げ、「女性天皇」も「女系継承」も容認せざるをえない。

七、また、現在極端に少ない皇族の総数を増やすためには、

女子皇族も結婚により「女性宮家」を創立できるように改め、その子女も皇族とする必要があろう。

八、ところで、日本の天皇として本質的に重要なことは、男性が女性かではなく、国家・国民統合の象徴として公的な任務を存分に果たされることである。

九、されば、その重大な任務は、結婚にともなって出産などの大役が予想される女性皇族よりも、まず男性皇族が率先して担われるようにすべきであろう。

十、従って、制度的には万全の措置として女系継承の可能性まで認め、具体的には「男子先行」の順位を定め、その確な運用に関係者で懸命の工夫努力をして頂きたい。



藤 森 馨

国士館大学 教授

略 歴

- 一九八二年 國學院大學文学部神道学科卒業
- 一九八五年 大倉精神文化研究所（財団法人）非常勤研究員
- 一九八六年 國學院大學日本文化研究所嘱託調査員
- 一九八七年 國學院大學日本文化研究所嘱託研究員
- 一九八七年 大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期単位

修得満期退学

- 一九八八年 埼玉県教育委員会神社文書調査員
- 一九八九年 國學院大學文学部兼任講師（二〇〇三年四月以降学部改組により神道文化学部）
- 一九九一年 日本学術振興会宗教学特別研究員（一九九四年まで）
- 一九九四年 図書館情報大学図書館情報学部非常勤講師
- 同 年 皇學館大學神道研究所研究嘱託
- 一九九六年 大倉精神文化研究所専任研究員
- 同 年 國學院大學日本文化研究所兼任講師
- 一九九八年 国士館大学文学部助教
- 二〇〇一年 跡見学園女子大学文学部非常勤講師
- 二〇〇二年 『平安時代の宮廷祭祀と神祇官人』（大明堂）により博士（宗教学）（乙文第一七二号）國學院大學

著 書

- 『平安時代の神社と祭祀』（共著）国書刊行会一九八六年
- 『伊勢原大神宮史』（単著）伊勢原大神宮一九九二年
- 『後白河院―動乱期の天皇―』（共著）吉川弘文一九九三年
- 『大中臣祭主藤波の歴史』（共著）続群書類従完成会一九九三年
- 『近世の精神生活』（共著）続群書類従完成会一九九六年
- 『大中臣祭主藤波の研究』（共著）続群書類従完成二〇〇〇年
- 『大正時代史』延喜式（共著）集英社二〇〇〇年
- 『平安時代の宮廷祭祀と神祇官人』（単著）大明堂二〇〇〇年
- 『平安朝儀式年中行事事典』（分担執筆）東京堂出二〇〇三年

『学習指導・調べ学習と学校図書館』(共著)青弓社二〇〇三年
『古代日本の政治と宗教』(共著)同成社二〇〇五年

テーマ「皇位継承をめぐる」

古代より継承されてきた皇位は、男子皇族により代々襲位されることが本旨とされてきた。

推古天皇以来十代八人の女帝の即位はあったものの、男系皇族へ継承するための即位であり、摂位と理解されている。

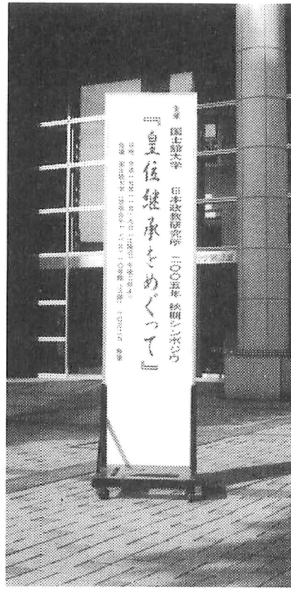
終戦後、大正天皇の直宮であり、昭和天皇の皇兄弟である秩父宮・高松宮・三笠宮三宮家を除き、他の宮家が臣籍降下を余儀なくされるにともない、皇位継承者の範囲が大きく狭まった。さらに現在、今上天皇の直宮秋篠宮家をはじめ、今上天皇の皇兄弟常陸宮家・子孫の存在する三笠宮家等に、次代を担う皇族男子が存在しないという事態が惹起された。こうした中で、今日的倫理観を重視する立場や象徴天皇制という範疇から、男子の皇位継承は行き詰まると認識し、男系女子皇族の即位を認め、その子孫による継承の可能性まで模索する見解なども、公に議論されるようになってきた。

皇位継承の問題は、政治的な問題はもとより、我が国の儀礼・文化と大きく関係している。先年の即位にともなう儀礼を含み、慎重に検討されるべき問題であろう。しかしながら、この問題を議論すべき皇室典範に関する有識者会議も本年一月に発会し、秋にはその結果を報告するという早さで、進められている。

こうした中で、今日的话题の一つでもある女性天皇の即位という視点ばかりではなく、広く皇位継承とはどのように行われてきたのか、という文化をも含めた側面から広く識者を集めて検討してみたい。

《講演・質疑応答》 二〇〇五年 日本政教研究所 秋期シンポジウム

『皇位継承をめぐって』



は議論がなされました。現代におきましてもそれが沸騰してきているという状況でございます。そのような中で、諸先生方においていただいて、議論を展開するというのは意義があることと思われまふ。この問題はわたくしも含めて国民一人ひとりが自分の意見を持つべきだと思います。どうぞ最後までおつきあいいただきたく存じます」

藤森

「では早速、嵐先生の方から、「皇親の範囲」についてご発表していただきたく存じます」

嵐

「嵐と申します。今日はひとりで古い時代についてお話ししたいと思ひます。お手元には『日本書紀』から作成しました資料があるかと存じます。ご参照ください。日本は良質な史料がたくさん残っていますが、まだまだ分からないところもあります。天皇に関して述べるとなりますと、どうしても

司会(藤森)

「只今より二〇〇五年日本政教研究所秋季シンポジウム「皇位継承をめぐって」を開催させていただきたいと存じます。まず、国士館大学日本政教研究所の所長、学長でもあります大澤英雄よりごあいさつ申し上げます」

大澤

「大澤でございます。わたくしも色々と勉強させていただきましたが、古代以来節目ふしめにおいて皇位継承をめぐって



『日本書紀』は重要となってきます。これはおおよそ千年前の奈良時代に作成されました歴史書です。また約百年前となりますと明治期になります。二つの時代に共通するのは、外国の文明を受け止めて、それを初期にあっては原形に近い形で根を下ろし、やがて日本に合う形に変えていくということです。それぞれの時代の考え方を知るのに、千年前の時代について『日本書紀』は有用であろうと思われます。ですから、『日本書紀』ではお隣の中国の影響があるのは自明と思われます。

本題の「皇親の範囲」ということですが、いくつか例をあげます。第一に、女帝と観るか皇后と観るかで歴史家にも二つの見方がありました。神功皇后です。水戸光圀によって「后妃伝」に収められました。『日本書紀』では一卷を成しておりまして、崩御されるまで皇子（応神天皇）が即位されていないなど、中身は極めて天皇に近い扱いとなっております。しかし天皇とは書いておりません。神功皇后は仲哀天皇の皇后でいらっしやいますが、開化天皇のところから彦坐王（ヒコイマスノキミ）、そして氣長宿祢王（オキナガスクネノミコ）とあって、その次に神功皇后が出てきます。『日本書紀』には神功皇后は開化天皇である稚日本根子彦大日日尊（ワカヤマトネコヒコオオヒノミコト）の曾孫（ヒマゴ）であり氣長宿祢王の女（ムスメ）であると書いてあります。曾孫とはご当人にかかることになっております。代数を見ますと、一世がご当人を含むのか、子供からなのかによって一代違っ

てきます。ご当人とはここでは開化天皇です。開化天皇を一世としますと、曾孫ですと四世になり、開化天皇の次の彦坐王からですと三世になります。しかし、『開化記』では六世あるいは七世としています。このように数え方は『記紀』でも違います。

もう一例あげます。こういう時に何かと登場します継体天皇です。この場合も、応神天皇を一世と数えるか、応神天皇の皇子（ミコ）を一世と数えるかによって一代違います。『日本書紀』はここでも応神天皇を一世と数えております。

『養老律令』の「継嗣令」では、天皇の兄弟や皇子は親王としない、親王から五世たちますと皇親とは呼ばない、としてあります。律令時代の「世」の数え方は、研究家の間でも意見が分かれています。

中国の例ですと、始皇帝は「始」ですから、ご当人が一世になります。後漢の光武帝は『後漢書』に九世の孫とありまして、黨弘道氏は子供から数えているなどとおっしゃっていたのですが、実はご当人から数えておりました。前漢の西漢世系図を見ますと、高祖を初代としますと孫の恵帝は三世になります。結果、光武帝は九世になります。

このように、子供を一世とするのと、ご当人を一世とするのでは一代違います。『令』の言う五世王は『日本書紀』流ですと六世王になると思います。ですから継体天皇はちょうどそこに当たり皇親に入ります。このほかご歴代は、離れていても五世以内となっています。

『日本書紀』はどうも中国流の考え方が伝わっているようで

す。一方『古事記』（開化記）では神功皇后は六世孫か七世孫となり、神功皇后は五世以内ではありません。系図的な問題から簡単には天皇として扱えなかったのだらうと思われる。『日本書紀』はひところ言われたような、奈良時代に天皇制を正当化するために作ったようなものではなく、きちんとした伝承を忠実に伝えていっていると読み取れます。

『令』が施行されますと、五世の捉え方の揺れがはっきりしてきます。そこで、大宝令と養老令の間の時代の景雲年間に「五世王までを皇親にいれる」との『格』が出ています。この間に出た『格』は『養老令』に盛り込まないとの原則です。で、奈良時代以降は五世までは皇親と見てよいのです。そこでもう一つ、諸王・諸臣と格の違う皇親が、皇親以外の相手と結婚する問題が出てきます。諸王なり諸臣が親王あるいは内親王と結婚された場合です。一番はなはだしい場合である女帝とご結婚される場合も想定して書いております。しかし、女帝も男帝と同じといったことが見られるだけで、明確な解釈は『令義解』にも『令集解』にも見えませんが、そこは省略します。

このように古代の問題を考えるとどこまでも複雑になります。単純化しようとしても例外が多すぎることになり、線引きが非常に難しくなります。

結論だけ申し上げますと、日本の皇室は中国やヨーロッパと比べると極めて男女平等です。平等とは何もかもが同じという意味ではなく、元々違うものはきちんと分けるという考え方です。むしろ男女分業論の上に立った平等になります。

皇位は『日本書紀』を見ましても、その後の歴史を見ましても、男子が天皇になるというのが大原則です。それに對しまして、崇神天皇の時に大殿（ミアラカ）の内にお祀りしておりました二柱の神の内の天照大神を大和の笠縫邑（カサヌイムラ）にお遷しする時にお仕えになったのが後の伊勢の斎宮に当たる方になるのかと思われます。また、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の叔母であり垂仁天皇の姫君であられる倭姫命（ヤマトヒメノミコト）が天照大神を伊勢にお遷した時から、天皇は御座所におられ、天照大神は伊勢で斎宮がお祀りするという形になります。こうしますと、男女平等、男女分業の形が良く見えます。

そして、どうしても男帝では後が継げない時には女帝が継ぐということになります。神功皇后の場合には神功皇后が崩御なさってから次の応神天皇がお立ちになっています。しかしこのように崩御まで女帝でいらっしゃる場合は少なく、たいていの女帝は成人された男性に途中で位を譲られています。こうしてみると女帝の特徴、日本独自の考え方が現れていると思われる。古代では卜定つまり占いによって次の天皇を定めることがあったかもしれませんが。そうしますといよいよ神聖な地位と考えていたことが明らかになります。

最後に、源平藤橘に関して駆け足で申し上げます。よく四大姓と言われますが、皇后を出す家柄が概ねこの四家ということです。その内、橘氏は藤原氏が預かります。藤原氏は折口信夫先生の説によれば、「水の女」という宮廷に仕えて命の再生をするという「藤原女」との関わりがありまして、大事



に最も近い方が皇位を継承するのが、わかりやすく、象徴天皇制にふさわしい皇位継承のありかただと思っております。

な役割をする家柄と言われております。源平は五世王の子孫でございます。皇后は女帝になることもあるので、そういう家の方が皇后になられ、所生の皇子が皇統を継ぐ訣で、普通の家とは違うということ、またいかに皇統が大事にされているかということがおわかりになるかと思えます。

以上でございます。」

藤森

「嵐先生から皇親の範囲、天皇と斎宮の役割、など非常に高度な問題に触れていただきました。

続きまして、高橋先生にお願い致します。あさって丁度いゆる有識者会議の結論が公表されますが、高橋先生は有識者会議の考え方も深くお知りになっておられる方でございますし、未来の皇室のあり方にも深くお考えになっておられる方でございます。「女性天皇の容認を」という題で発表いただきたいと思えます。」

高橋

「高橋でございます。有識者会議に参考人として招かれた時にも申し上げたのですが、私の立場は女性天皇を認め、皇位継承順位は男女を問わず長子優先とするというものです。長子優先とは、直系・長兄（姉）・最近親者が皇位を継承する、

との意味のことです。亡くなった天皇

まず女性天皇の容認についてです。確かに千数百年続いた男系天皇から女系に移るのは、歴史的な大転換です。皇室の伝統は守るということは、実際に大事なのですが、しかし現状では皇統に属す男系男子を探すのが困難です。例えば、宮内庁のホームページには皇室の構成というコーナーがありまして、現在の皇室を構成する両陛下や皇族の方々のお名前が載っております。男子継承に拘りますと、そこに載っていない方をお連れすることになります。男系男子が行き詰まったからこういう問題が出てくるのでして、有識者会議に内閣総理大臣から与えられた使命は、安定的皇位継承はどうすればよいのかということでした。そうしますと現在の男系男子の継承は安定的なやり方ではありません。従って将来同じことが起こると困りますから、女性天皇への道は開いておいたほうが良いのではないのでしょうか。

一部で強く主張されております「男系男子は伝統であり絶やすべきではない。実際に天皇家の血筋の方がおられるではないか」との主張ですが、その通りではあります。昭和二十二年に一四宮家のうち、昭和天皇の直宮であらせられる秩父宮・高松宮・三笠宮以外の一宮家が臣籍降下されました。

私が宮内記者会におりました三〇年前程には、あまりこういうことは話題になりませんでした。単純な質問としまして、昭和天皇のご親戚の方々である、香淳皇后のお里は久邇家、昭和天皇のご長女の成子内親王が嫁がれたのは東久邇家、明治天皇の四人の内親王様は東久邇宮家・竹田宮家・北白川宮家・朝香宮家がなぜ皇籍を離れたのか。その理由は、いずれ

も五五〇年前の伏見宮家につながる家柄だからでした。一番の問題は当代の天皇とはあまりにも血筋が遠いということとでございます。旧宮家から復活させよう、養子に持ってこよう、女性の宮家を立ててそこに旧一一宮家の方々をお迎えしてはどうか、という意見もあります。

ただ、六〇年間民間にあった方々の復帰を国民はどうみることが問題です。明治の皇室典範でもいったん臣籍に下った方々の復帰は認めておりません。天皇とは単に血のつながりだけではなく、国民の尊敬、親しみやすさが問題になります。旧宮家の方々の復帰は難しいのではないのでしょうか。日本世論調査会の調査で、女性天皇を可とする人は八四パーセントに上っています。もちろん、これは単なる世論調査であって国民の実態を反映しているのかとの批判もあります。しかし、果たしてこの数字を無視してよいのでしょうか。

もし旧宮家の方を連れてこられた場合、「ああいうおかわい愛子様がおられるではないか」という考えも相当出てくるのではないのでしょうか。皇室の伝統に固執したすると逆に象徴天皇制にとってよろしくないのではないのでしょうか。

長子優先の他に兄弟姉妹間の男子優先の問題があります。

昭和天皇と香淳皇后の場合ですと、上から四人は内親王様が続きました。戦前では男子継承ですから両陛下とも悩まれたわけですね。香淳皇后さまは「女腹である」というような陰口を言われました。昭和天皇は、旧皇室典範の養子禁止規定の変更を、わざわざ宮内大臣を遣わして元老西園寺公望に御下問させたなどという記録が側近の牧野伸顕の日記にあります。

そのようなことをやっている内に今の陛下や常陸宮さまが生まれたということがあります。ずっと内親王様しか生まれず、最後に親王様が生まれたとしたら、その方がお継ぎになるわけですが、皇位がいつまでも決まりません。国民の喜びはどうなるのでしょうか。

男子継承は必ずしも安定的継承ではありません。なぜ男子に拘るのが疑問です。現在の憲法の天皇の国事行為は極めて儀礼的です。昭和天皇御病氣の際には当時の皇太子殿下が代行されました。その間、皇太子殿下は渡米されましたが、さらに徳仁親王が代行されました。そのように代行の代行まで可能であるならば、妊娠出産に際してもそのようにすれば良い事になり、何の問題もありません。大嘗祭など宮中祭祀に関しても、所先生がこれから詳しく話してくださると思いますが、問題はないと思われます。最後の女帝である後桜町天皇も大嘗祭をなされたとの記録がありますし、宮中三殿での色々なお祭りも問題はありません。

とにかく継承の幅を広げた方が良いかと思えます。明治以前は、女帝も側室も男系男子も大丈夫でした。明治になって、女帝が廃されました。そして戦後、側室が廃されました。今は男系男子ですが、少子高齢化の時代に男系男子に固執して、安定した皇位継承ができるのでしょうか。

傍系の旧皇族の復帰に関してですが、国民になじみの無い方を皇室にお迎えして果たしてうまくいくのでしょうか。皇室の男系男子の伝統は難しい問題です。しかし、大嘗祭や伊勢の式年遷宮や即位礼も天皇の地位に伴う大事な祭祀・儀式



百地

「ご紹介いただきました百地でございます。皇室典範に関する有識者会議は、女性天皇・女系天皇容認の立場で報告書を纏めようとしております。皇

藤森
「高橋先生からは、女帝容認のお立場から、また長子優先のお立場からご意見を頂戴いたしました。ありがとうございます。続きまして百地章先生に憲法学のお立場から、男子の皇位継承、宮家の再興の視点からお話いただきました。よくお願い致します。」

です。大嘗祭も約二二〇年、式年遷宮も約一三〇年途絶えています。その当時の人たちが天皇にとって大事なお祭りであるとして復活させたのです。元号も、一人の天皇が平均あたり二・八回変えてきましたが、明治になって一世一元になりました。その方が時代のイメージが湧きます。いまの皇后陛下にしても伝統にそって旧皇室典範三九条に従って探してもお相手がいらないから民間からお迎えすることになった訳です。伝統とは精神の問題ではないかと思えます。今まで色々変わってきたのですから、ここで象徴天皇にふさわしい形を考え、将来にわたって存続させていく制度にしていくべきではないでしょうか。

あとはフロアの方々のご意見を伺いたいと思います。」

位の安定的継承を確保するためであり、国民の大多数が支持しているというのがその理由のようです。しかし、有識者とは名ばかりの、ほとんど素人のみの集まりで、しかもわずか一年たらずで二〇〇〇年に及ぶ男系男子の伝統を変更しようとするのは許すべからざる暴挙であります。従ってその取り纏め方は、内容だけでなく手法にも疑義があります。確かに過去には推古天皇や持統天皇のような女帝がおられました。しかしそれはあくまで一時的例外的存在でした。もうひとつ、有識者会議は輿論を尊重すると言いますが、果たして国民は女性天皇と女系天皇の違いを区別して理解しているのでしょうか。有識者会議は第一子優先をわかりやすい制度と言っていますが、民間でさえ男子がおれば姉がいようと男子が相続するのは一般に行われている慣習です。それに関わらず男子優先をわかりにくいとするのは国民を愚弄するものであると申し上げたいと思います。伝統ある皇位継承制度を民間以下のものにしようとするのかという感じがします。

そこで、有識者会議への疑問、女系天皇の問題点、男系維持の為の宮家整備の必要性に関して私見を述べたいと思います。

皇位継承に関しては皇太子殿下や秋篠宮殿下がおられますから、その後を誰が継ぐかという問題です。これが現実の問題になるのは何年も先のことです。今すぐ結論を出さねばならないというのはあまりにも性急ではないかと思えます。将来の皇位継承者を早く決め、帝王学を行う必要があると言われる。後でも述べますが、帝王学の為に伝統を否定するの

は本末転倒です。

有識者会議のメンバーに関して所先生はベタ褒めしていらっしゃいましたが、あえて忌憚の無い意見を申し上げさせていただきますと、彼らは、国民の代表であると僭称して皇室の声も国民の声も聞かずに拙速に結論を出そうとしています。

このような暴挙は何としても阻止しなくてはならない。報道によりますと座長の吉川氏の発言は耳を疑う不遜なものばかりです。例えば「我々の世代が歴史を創るという立場で検討したい」とおっしゃっている。しかし「歴史に学ぶ」というのが本来の謙虚なあり方ではないでしょうか。また「国民の代表という意識で議論してきた。改めて国民の意見を聞くことは考えていない」とおっしゃっていますが、私も含めて誰も国民の代表とは考えていないと思います。ただの諮問機関のメンバーというだけです。それにもし国民の代表であるというのであれば国民の意見に耳を傾けるべきであります。矛盾しています。あるいは「皇族に意見を聞くのは憲法違反」とおっしゃいますが、何が根拠でしょうか。氏の専門はロボットの工学で、私の専門は憲法ですので、いくらでも説明はできます。それに、女系天皇に反対された寛仁親王に対しては「どうということはない」と不遜極まる発言をされています。このような人物を座長としております有識者会議の言うことを本当に信じてよいのか、素朴な疑問があります。

報告書の取り纏め方ですが、男系継承に関してはその困難なことをみを強調しております。他方で女系天皇に関しては様々な問題点があるにもかかわらず、頰かむりをしたまま結

論を出そうとしています。このように最初から女帝女系天皇ありきの結論の報告書を認めることは私にはできません。

旧皇族の皇籍復帰に関しては、有識者会議は「旧皇族は六〇年近く一般国民として過ごしており、また今上天皇との共通の祖先は約六〇〇年前にさかのぼる遠い血筋の方々である。このような方々を皇族としてお迎えして国民の理解が得られるであろうか」とおっしゃっております。先ほどの高橋先生もそうでした。しかし何を根拠にそのように断定されるのでしょうか。

また、二〇〇〇年以上続いてきた男系継承の意味を国民は理解しているのでしょうか。確かに各種世論調査の示す所では国民は女性天皇を支持しています。しかし、女性と女系の区別はできているのでしょうか。

我が国では女性天皇も例外的存在です。必ず男系男子に譲られております。したがってこのままでは男系男子がいなくなるから、との理由で出てきた今回の女帝論とは全く意味が違います。このまま女帝を認めれば必然的に女系容認を意味します。なぜなら愛子様が即位されても、お相手は民間から迎えるしかないからです。そうなりますと次の天皇は、父系社会の我が国では、その民間の方の流れを汲む方と見られてしまいます。例えば仮に愛子様が徳川家の方と結婚なされば、これまでの皇統とは異なる新しい王朝、徳川王朝の誕生とみられても仕方がない。イギリスでは女系を認めているではないかとの意見もありますが、チューダー朝・スチュアート朝・ハノーバー朝と王朝交替のつど、夫の方の家名を名乗ってき

たわけです。そうしますと我が国の女系論者は、別の王朝のようなものを考えていらっしゃるのでしょうか。

もし女系が続けば先ほどの例で言いますと、父が徳川、祖父が藤原、ということもありうる訳です。これでは皇室と国民の区別はますます曖昧になります。だからこそ万世一系の男系継承を守ってきたわけです。従って私は、女系天皇の採用は絶対駄目だと言う気はありませんが、しかしその採用には慎重の上にも慎重であらねばならない。

加えて有識者会議の報告書では、女系天皇を採用する場合に最も困難な問題である皇婚殿下について何の回答も指針も示しておりません。女帝の夫君をどこから連れてくるつもりでしょうか。女性皇族のお相手を探すことさえ容易ではないのに、果たしてそのような相手が見つかるのか。またその相手は誰でも良いのか。国民がそのような人で納得するのか。

逆に皇室を利用しようとするような人物が介入してきたらどうでしょうか。実は今日の朝日新聞でも鳩山由紀夫さんがそのような危惧を述べていました。これに対する回答は何もありません。それどころか吉川座長は記者会見で「配偶者選びの難しさは男性でも女性でも本質的に変わりはない」と嘯いていらっしゃいます。

こんな調子で女系天皇を認めるのは無責任ですし、危険極まりないと考えます。予定されている報告書が女系天皇を認める第一の根拠は皇位の安定的継承であるとのことですが、皇位の安定的継承の為であれば二〇〇〇年に及ぶ男系継承の伝統を捨ててしまつてよいのでしょうか。

次にあげられるのが、帝王学の課題です。女系優先さらには第一子優先ならば早くから帝王学を身につけていただくことができるとの根拠です。つまり早くから愛子様を第一二七代皇位継承者として認め、帝王学を修めていただくとの主張です。しかし、男系を維持しつつ皇位を安定継承していくには、常に一定数の宮家を確保・整備していくことの方が大事な訳です。そうしておけば旧皇族からの養子なども可能になります。そのような努力を払おうとしないまま、女系天皇に走るのは本末転倒ではないでしょうか。そもそも帝王学とはすべての皇族がふさわしい教育として身につけておくべきであり、それこそが万全の備えです。そうでなければ急に帝王学を受けていない方が皇位継承されるような事態も置きかねない訳です。

臣籍から皇籍に復帰され皇位に就かれた宇多天皇の場合、むしろ厳しい御自覚のもとに天皇としてのお務めをなされ、画期的な御事跡を残されています。この宇多天皇の事例は、帝王学云々の議論に対する有力な反論となるでしょう。帝王学が早くからできればそれにこしたことはありません。しかし逆に、帝王学の為と称して男系継承の道を閉ざしてしまうのはこれも本末転倒であります。

従って女系天皇論には説得力がありません。それどころか女系天皇論者の中には天皇制廃止論者もいます。つまり女系天皇によって皇統を断絶させ、その正統性をあげつらつて天皇制を廃止しようとの戦略が潜んでいるわけです。このような人々の存在を忘れて安易に女系天皇を認めるのは危険では

ないでしょうか。例えば横田耕一教授などはまさに天皇制廃止論者です。その方が最近は一生涯懸命に女系天皇を主張されています。しかも女系天皇によって伝統から乖離した別の天皇制の成立する可能性をはっきり指摘しておられます。

それから奥平康弘教授も天皇制に対しては非常に批判的ですが、女系天皇には賛成しています。そして女系天皇は万世一系を侵食するので、他の原理でもって象徴天皇制を正統化する方法を考えねばならないと述べています。つまり、女系天皇など簡単に正統性を認めることができるはずがないと暗に述べているわけです。

最後に宮家の整備の問題です。戦後、GHQの圧力によって一宮家が廃絶されました。その後、昭和三十九年に常陸宮家、五十九年には高円宮家、六三年には桂宮家、平成二年には秋篠宮家も創設されています。これは私の想像になりますが、GHQの圧力から廃絶された宮家を何とかしたいという昭和天皇のお気持ちの表れではなかったかと考えています。

しかしその一方で、秩父宮家は平成七年に、高松宮家は平成一六年に廃絶していますし、平成一四年には高円宮殿下が薨去されています。また、常陸宮家、三笠宮家、桂宮家ともに男子のお子様はおられません。まだ、皇太子御一家と秋篠宮家には親王誕生の可能性はあるとしても、このままではすべての宮家が消滅してしまいます。皇位継承者を確保できなくなります。

だからといってすぐに女性の宮家に飛びついてよいのかという問題になります。宮家の役割は皇室と国民の架け橋とな

り、天皇を御助けすることです。その為にもご多忙である天皇皇后両陛下に代わって民間の行事に参加し、あるいは外国を訪問して友好親善の実をあげるのは重要な任務です。しかしながら宮家の最大の役割は皇室の危機に備えることにあります。ということは象徴天皇制を永久く安泰たらしめ、維持を図る為には、宮家の存続と充実を欠かすことはできません。それ故急ぐべきは、危機にある宮家の存続と拡大です。そして旧皇族男子による養子を可能とするよう皇室典範をすみやかに改正するべきです。また、旧皇族の皇籍復帰も検討すべきでありましょう。幸い、GHQによって強制的に廃止された旧一宮家の内、久邇宮家・東久邇宮家・竹田宮家には適齢の独身男子継承者がおられます。それらの方々の養子や内親王様との縁組による旧宮家の再興、さらに皇籍復帰などもあると考えられるのではないのでしょうか。これによって男系男子による伝統維持は可能になると思われまます。

反対派の方々は、六〇〇年前に皇籍を離れた伏見宮家の子孫であり、しかも民間に下って六〇年も経っていると反対されています。しかし戦前までは五五〇年間、伏見宮家は伝統ある宮家と見られてきたわけです。その五五〇年の伝統に比べれば六〇年などわずかな期間です。しかも皇籍離脱といってもGHQの圧力によるものです。これに昭和天皇が強く抵抗されたことは周知の事実であります。宮家の廃絶が決まるや、昭和天皇は皇族方を送別会に招かれています。そして「誠に遺憾である」とされた上で、「皇籍離脱後も変わらぬ交際を望む」とのお言葉を賜っています。ですから今でも旧宮

家の方々は菊英会や菊栄親睦会を通じて皇室とは親しい交際を続けておられます。ちなみに旧宮家の中には、明治天皇のお子様である内親王様と結婚なされた竹田宮家・北白川宮家・朝香宮家・東久邇宮家がありますし、東久邇宮家には昭和天皇のお子様である内親王様もお入りになっていますから、旧宮家と皇室は血縁的にもかなり近いことがわかります。

現に先日の紀宮様の結婚式で斎主をおつとめになられたのが、伊勢神宮大宮司である旧宮家の北白川道久様です。旧宮家の方々の中には、竹田恒和JOC会長のように社会活動を通じて慕われている方も少なくありません。このようなことがわかれば、旧皇族からの皇籍復帰や養子縁組に国民も納得すると思います。こういうことが語られないから国民は旧宮家のことを知らないし、知らないから理解できないだけです。女系天皇はわかりやすさだけが強調されますが、その難しさについてはほとんど触れられていません。他方で男系継承についてはただ難しいというだけで斥けています。果たしてこれで公平に議論し、国民が正しい理解ができるでしょうか。最後に、女系天皇がやむをえない場合には慎重の上にも慎重を期すべきです。東宮家や秋篠宮家には男子誕生の可能性もまだあります。従って、宮家整備の皇室典範改正こそ急ぐべきであると考えています。どうもありがとうございました。」

藤森

「百地先生からは宮家復興の理由、また憲法学のお立場から男子継承がふさわしいというご意見を承りました。ありがとうございました。」

続きまして、所功先生からお話を承りたいと思います。」

所 「失礼致します。所でございます。先般（六月八日）、皇室典範有識者会議に招かれてお話をしました際に用意した論考の要点を、お手元のパンフレットに1から10まで纏めてあります。」

有識者会議につきましては、百地先生からもお話がありましたように、色々と批評がございます。しかし、今回の有識者会議の功績は、今まで一般に知らなかった皇室典範に関する資料が、実によく集められ、それが判り易い形にして提供されたことだと思います。学生たちも首相官邸のホームページで公開されている資料を、第一回の会議から読んでいるような状態です。すべてプリントアウトすれば三〇〇頁ぐらいになります。もちろん決して充分に論議が尽くされているわけではなく、また資料も出尽くしているとは思いません。ただ、小泉内閣の下で会議ができ、国民の関心に応えるため、このような資料が集められ公開された意味は大きいと思います。

一方、神社新報社も、よく資料を集めておられます。側室の例であれ、外国の例であれ、明治のときの議論であれ、よく整理して「神社新報」に連載されたことは、まことに有益だと思えます。今日の会合も、それぞれの論拠を確かめあう場にして頂けたらと念じております。

発表者の四人も企画された国士館大学の御趣旨もそうでしょうが、今の憲法に定める象徴天皇制をいかに末永く続けたらよいか、という肯定的建設的な立場を前提に議論しております。



す。これをやめてしまえ、けしからんという意図の方はおられない訳です。

すると思いは一つです。どうしたら今まで続いてきた皇室が、これからも続いていけるようにできるか、という知恵の出しあい입니다。よって、もし私に

誤りがあれば指摘していただき直していかねばならないのですが、逆に反対論者に誤りがあれば、どんな方であろうともその誤りを指摘していかねばならないと思っております。

いま一番憂慮されることは、皇室に対して篤い思いを持っている人々が、意見の相違ゆえに心情的な齟齬を生じているのではないかとことです。それを最も憂慮しておりますのが、私の恩師でもあります田中卓先生であります。

田中先生は終戦直後に東大を卒業されて、古代史・上代史の本質的な問題点の解明に命懸けで取り組んで来られた真の歴史学者であると思われます。数年前からご病気のため療養中ですが、文芸春秋社の『諸君』という雑誌に「祖国再興」という連載を書いておられます。それを読みますと、戦後の古代史学界がズタズタにされていたのを、何とか『古事記』『日本書紀』など古典に基づいて、あるいは考古学の実果などを取り入れて、本当に日本はどのように建国されたのか、それがどのようにして今日まで伝わってきたのかを明らかにされました。その先生が皇位継承に関してどのような考えをお持ちか、皆様にもお知りいただきたいと存じます。私の考えも大筋同様です（若干相違もあります）から、併せて申

し上げたいと思います。

まず先生は、過去に「女帝」が公的に存在したことは、中継ぎかどうかは別として、明白な事実であります。女帝の存在は、すでに推古天皇から実例があるのみならず、『大宝令』の「継嗣令」に見えています。「継嗣令」には、天皇のご兄弟と皇子を親王とし、次の二世から四世までを諸王と規定した上で、そこに注がついておりまして、「女帝の子も亦た同じ」とあります。『大宝令』『養老令』は今の憲法に相当する国家の根本法ですが、それに「女帝の子も亦た同じ」と書かれている意味は小さくありません。これは、男性天皇を原則としながら、万一の場合には女性天皇も認めるのみならず、女帝の子も存在することを認めるほかない、という規定です。

それを踏まえれば、皇位継承は、男系男子が原則として続けられてきたことは間違いありませんが、皇后に必ず男子生誕とは限らず、他にも不測の事態を予想して、万一の場合には女帝もありうるという緩やかな理解が必要である、というのが第一点であります。

つまり、田中先生も私も、女性天皇や女系継承を積極的に実現すべきだというわけではありません。古来そうであったように、男系男子の継承ができるのであれば、そうすべきであると考えております。しかし、現に皇太子様・秋篠宮様よりお若い男子がおられない訳ですから、万やむを得ざる状況下で女帝の存在、そして女帝である以上、独身でいらっしゃるわけにはいきませんから、ご結婚になった後にお生まれになる方の女系継承ということも、制度的には認めるほかないと

いうことであります。

制度とは規制です。人間の行為に枠をはめる、ということですから。その枠がきつすぎると人間は窒息してしまいますから、適度に緩める必要があります。明治以前は、皇位継承に関する法がありませんでした。少なくとも成文法はありませんでした。あったのは慣習法です。つまり、古来どのような行われてきたのかという先例を踏まえながら、その時々の実情に合わせて天皇もしくは関係者が決断して皇位継承を可能にしてきたのです。

数年前（平成十年）に高橋紘さんと書かせていただきました文春新書の『皇位継承』にも、皇位継承は過去においても「綱渡り」であったと記しました。実に難しい状況において、慣習に基づき、また現実には照らし、その時その時で決断をしてきたのです。現状においては、女帝も女系継承も制度として認め可能性を広げておく必要があります。

従来の男系男子による継承は、どうして可能であったのでしょうか。これも田中先生が書いておられますとおり、「側室」が公認されていたことを忘れてはなりません。多数の側室が許容されていたからこそ男系男子の継承が可能になったのです。一二五代のうち、約半数は側室からお生まれになった方々です。もし側室が今後とも許容されるのならば、男系男子の維持も可能でありましょう。しかし、それは認められません。旧皇室典範では認められていましたが、すでに昭和天皇が皇太子時代の大正十一年に女官制の改革を自ら提示され、側室を絶対に置かないとのご意思を貫かれました。断じて側室を

置かれないのは、昭和天皇の大御心であります。そのことを我々は決して忘れてはならない。それ故に戦後の皇室典範は、かなり旧皇室典範を受け継いでおりますけれども、側室の下にお生まれになる「皇庶子孫」の継承は認めないと明記したわけです。よって、これを後戻りさせてはならないと思っております。

もう一つの規制は、新旧典範ともに皇族の「養子」を認めていないことです。このような二重の制約があるのに、あくまで男系男子の貫徹を主張するのは、男子を産まない女性性は皇太子妃の資格なしと烙印を押すに等しいといわざるをえません。現在これで一番苦悩されているのは、おそらく天皇・皇后両陛下、皇太子・同妃殿下かと拝察されます。

日本の皇室は二〇〇年以上の歴史を持っていますが、それを現に担ってくださっているのは、今上陛下であり皇后陛下であり、また皇太子様であり妃殿下であり、さらに宮家の皇族の方々です。そういう方々は、どういうお考えを持ち、どういうお悩みを持っておられるのか、我々は直接お伺いすることができませんけれども、それを推し量り、忖度することは可能であります。また側近の方々の口を通じて言われることから、我々は天皇陛下や皇太子様のご意思を拝察することも不可能ではありません。

特に昨年から皇太子様や天皇陛下がおっしゃったこと、その意味するところを、我々はきちっと耳を澄ましてお聞きし、直接間接に提起されている問題を解決するにはどうしたら良いのかを考える必要があります。この点は、田中先生も書か

れておりますが、まさに恋するような気持ち、皇室の方々に深く思いを致し、何とか安らいでいただけるようなありかたを考えていくという思いが大切です。幕末維新の方々が言っている「恋闕」とか「おおきみがいいというてならぬ」などという気持ちを、我々も持つ必要があると思います。

これは単なる同情ではありません。二〇〇〇年に及ぶ伝統を現に担っておられる方々のお立場を考えながら、どうしても現実の困難を解決できるかということに思いをひそめる、ということでございます。この精神を欠いて単に過去の歴史や制度を論じて、問題の解決にはなりません。実情に合わないハードルを高くすれば、必ず躓きが起ります。

そこで、田中先生の具体的な提案は、歴史の知恵に学びながら、女帝の可能性も認め、新しく四世内の皇親制を定め、その範囲内からの養子制を認めることで暫定的におさめ、本格的な皇室典範の改正は、将来皇太子殿下が天皇となられた暁にその勅定を得て行えば良いとしておられます。

我々は皇位継承問題に関して、いま万全の対策を考え、決めてしまえるほど賢明ではありません。皇室も変わっていかれますし、内外の情勢も変わっていきます。例えば、五〇年前に憲法改正は不可能に近いと思われましたが、今日では与野党ともに憲法改正を言い出している。それこそ百地さんがおっしゃいましたように、我々が考えることは当面の対策です。もちろん次の御世のことまで考えて充分な対策を立てよう努めたいのですが、それにはあえて申しますと、皇室典範の改正は何回も行わなければなりません。

ご承知のとおり、戦前の皇室典範は憲法と並ぶ国家の二大根本法でした。ところが戦後は、憲法の第二条にありますように、国会で議決した法律であります。皇位継承の問題は、皇室の最重要事ですから、その改正も本来は陛下の御意を受けて皇室会議で行うべきです。しかし現在の皇室会議では、皇族は二名だけですし、改正を発議したり論議する権限がありません。そのため、当面は法律改正の手続きによって継承資格の枠を広げておき、次の御世に本格的な解決をはかるほかないと思われまます。

以上、田中先生のお考えを踏まえて、私の考えも少し申し上げましたが、これ以下、百地先生のご発言に関連しまして、いくつか述べたいと思います。

今の日本国憲法は、占領下の基本法ですから、それ自体を直さなければなりません。とはいえ、当面の現行法ですから、これを前提にして考えれば、マッカーサー元帥でさえ、天皇は「元首」であり、皇位は「世襲」である、とはっきり示しています。それを踏まえて今の憲法はできております。占領軍と雖も天皇・皇室を無視して占領統治はできないと知っていましたから、有効利用したのですが、当時の日本人は皇室を認めない占領軍には服従しないとの気概があったから、このような憲法になったのだと思われます。「象徴」という表現が良いかどうかは別として、「皇位は世襲」と憲法に明記されていることは充分意味があると思います。

この世襲は、これまで男系男子により行われてきました。ただし、それが可能であったのは側室による庶子継承も認め

てきたからです。およそ過去の遺物と永続する伝統は異なります。たとえば、ギリシャのパルテノン神殿は、過去の遺物です。それに対して伊勢の神宮は、二〇年ごとに建て替えられますから、生きている伝統です。側室という過去の慣習は、再び認める事ができませんから、これを生きた伝統とは言えません。それにも拘わらず、皇族の中から側室に関して発言が出ました。三笠宮家の御長男寛仁親王が『ざ・とど』というミニコミ誌に書かれたエッセイです。

寛仁親王殿下は、ご承知のとおり福祉活動に大変ご熱心ですし、靖国神社の春秋例大祭にもよくお参り下さいますので、私も存じ上げておりますが、実に立派な方です。ただ、このエッセイには黙って見過せない記述が含まれています。新聞の抜粋は不正確ですから、原文により正確に引用しますと、「かつてのように側室を置くという手もあります。私は大賛成ですが」云々と書いておられます。これはいかがなものかと思えます。

念のため、『読売新聞』は後半の「私は大賛成ですが」を省略し、『朝日新聞』は側室のことを全部削除していますが、これでは殿下の真意が正確に伝わりません。しかし、今の世の中で側室を置くことに大賛成との意見が通りそうにないことは、殿下ご自身が続きの文で断っておられます。それでも男系男子を確保する方法の一つとして「側室を置くという手」まで持ち出されるのは、先ほど申し上げたとおり、昭和天皇のご意思に照らして、あるいは社会の実情に照らして、はなはだ疑問に思います。

次に有識者会議のことを素人集団と批判する人が少なくありません。しかし、素人と専門家はどこで区別されるのでしょうか。たとえば、私が名古屋大学でお世話になりました笹山晴生先生は、その後東大に戻られ、やがて学習院に行かれましたが、今日の古代史学界の第一人者であります。しかも今の皇太子殿下が中学生の頃から、歴代天皇史を進講された方です。これほどの先生を素人と言うのは失礼です。

また座長代理の園部逸夫さんは、最高裁の判事をされましたが、第一法規出版から『皇室法概論』という本を書いておられます。皇室に関して書かれた本は戦後もいくつか出ておりますけれども、皇室法に関してこれほど丁寧に書かれた本は他に知りません。そういう意味で、皇室関係の専門家と看做してよいと思います。

それ以外の方々も、その道の権威でして、各界を代表される方々が熱心に勉強され真剣に検討を重ねられたことに意味があると思います。

さらに有識者会議では、毎回貴重な資料が配布され、首相官邸のホームページにも掲載されています。それを作成したのは内閣官房のスタッフでしょうが、それには宮内庁書陵部や国会図書館などの歴史・制度のプロが協力して膨大な資料を整理して出してくれたものと思われます。こういう基本的なデータを一般の人々も精読して、正確な知識を共有する必要があります。

最後に、本質に関わることですが、男系とか女系とかいう言葉は、簡単に定義できません。例えば『VOICE』に渡

部昇一さんが、「歴史的に見た最初の天皇は神武天皇だが、それ以前に遡れば皇室は女系中心である。そもそも皇室の先祖とされるのは女帝である天照大神である」と書いておられます。もちろん、神武天皇以前は神代の物語ですから、男系とか女系とかと簡単には言えません。ただ、日本の皇統は、天照大神を早くから皇室の祖先神と仰ぐ歴代天皇により続いてきている。言ってみれば、男性とか女性を超えた母なるもの、母性こそ重要であり、男性であろうと女性であろうと、天皇であらせられることが大事なのです。

天皇は大和言葉でスメラミコトと申します。スメラミコトとは神々を祀る「澄める令」であり、また人々をまとめる「統べる尊」でもあるといわれています。つまり、天皇の役割とされるマツリゴトとは、一つは神々を祀られること、もう一つは人々をまとめることです。それは男性であれ女性であれ、天皇になられたら、どなたでもなされることです。そういう意味で、男系とか女系を言い過ぎますと、本質からかけ離れてしまいます。

ただし、私は女帝も女系も認めるべきと思いますが、できれば男性が継がれたほうがベターだと思っています。女性の場合、結婚に伴いまして、懐妊・出産という男性にできない大役が期待されます。また、お子様を育てられるのも、重要な役目です。そう考えますと、むしろ男性皇族が率先して皇位を担われるのがふさわしいと思われまします。

従いまして、私は皇位継承の資格を女帝にも女系にも認めて制度の枠を広げるべきだけれども、その継承順位は男子優

先の工夫が必要だと考えています。高橋さんは長子優先のお考えですけど、私は弟君がお生まれになったら、姉君より優先されるべきであろうと思います。

ところで、女帝・女系を認める場合、問題になると予想されるのは、女性天皇・女性皇太子にお相手が見つかるかどうか、なかなか難しいと思われます。これまで男性皇族の所へ一般から女性が入るのも難しかったのですが、これから女性皇族の所へ一般から男性が入ることは容易でないと思います。

そこで、やはり現皇族と比較的親しいおつきあいのある元宮家とか元華族などのご子孫が、いわゆる婿養子として入られるのが一番ありがたいことではないかと思われまします。そのことを有識者会議で申し上げましたら、園部さんから質問がありまして、「それは制度化できますか」と言われましたが、制度化は無理だ、とお答えしました。

法というものは、実定法だけではありません。法文に書ける事以外ですが、多くの国民の期待として、皇室に近い立派な方々が入っていたらいいならば、これほどありがたいことはありません。

いま我々は苦渋の選択を迫られています。それならば改正をしなければ良いという意見も出ています。しかし、現状を放っておいて、男系男子が絶えたら皇室がなくなってしまうのです。

そこで、本来ならば、昭和二十七年の独立直後に旧宮家の復活や皇室典範の改正を行っておくべきでした。けれども、すでに戦後六十年間経ちましたから、今は制度を広げる一方、



藤森

可能な限り男子がお立ちいただけるように工夫する必要があると思います。以上でございます。」

「四人の先生には熱いご発表をいただきありがとうございます。大変勉強になりました。皇室をお守りするには長期的な視野が必要であるということでしょうか。それでは休憩の後、第二部の質疑応答及び討論に移りたいと思います。」

質問者（嶋津宣史）

「嵐先生にお尋ねしたいと思います。異姓養子と皇統についての質問です。古代律令では異姓養子は認められませんでした。しかし、時代が下るに従い、公家社会では増加しました。中国と違い異姓養子の禁はなじまなかったのでしょうか。では何故皇統にのみ維持されたのでしょうか。皇統の特質についてお聞きたいと思います」

嵐

「異姓養子についてはおっしゃる通りです。皇統の特色と申しますと、神との繋がりという宗教的側面が大きく、その意味でのエンドガミー（族内婚）というのが特徴となり、そこに皇室の神聖性があるのだと思います。あえて言えば天照大神をお祀りできる家柄ということにつけるのでしょうか。ですから皇后は皇族とするという原則のほかに、律令前では采

女（ウネメ）、律令制下では氏女（ウジメ）を豪族が天皇にだけたてまつる、というような制度がありました。養いて子となし財産の分与にあずかるのが養子ですが、その点についても一般の家で行われることと皇室で行われることには大きな違いがあります。その違いは古代においては顕著です。時代が下るに従って曖昧にはなりますが、天皇のご猶子にしても異姓の方はまずいけません。」

質問者（藤本頼生）

「嵐先生にお尋ねしたいと思います。『令義解』の中の「女帝の子も亦た同じ」の一文についてです。所先生あるいは高森明勅先生も引かれておりますが、女帝の子を親王とするかどうかの問題についてお伺いしたいと思います。また女帝をどうとらえるかです。中継ぎととらえるべきでしょうか。」

嵐

「難しい質問ですが私なりに答ええます。時代背景として女帝を必要としたのは間違いないと思います。ただ、女帝の子というだけの資格で皇位に即かれた例はありませんので、その点を無視して理屈だけで解釈すると非常に難しいと思われます。皇位継承法を明文化するというのは明治の皇室法の整備の流れの中で出てきたことがらだと思えます。継嗣令は皇位継承法ではなく、親王以下、諸王・諸臣に関する規定です。次に中継ぎについては、折口信夫先生のナカツスメラミコト論以来の研究がありますが、今日の学界の大勢としては、少なくとも単なる中継ぎとして理解しないほうが良いと考え

ているようです。」

質問者

「二六〇〇年の意味をお教えてください。」

藤森

「私が代わって申し上げます。昭和一五年が神武天皇即位二六〇〇年だったということです。」

藤森

「発表者相互の質疑応答に移りたいと思います。」

百地

「所先生は、田中卓先生も女帝女系容認論のように言われましたが、そのことに関しての質問です。田中先生のこの文章を拝見しますと、原則は男系男子であると書かれております。「歴史の知恵に学んで女帝も」、とのことですから男系のもとで女帝も認めよとの意見ではないのでしょうか。」

所

「ご本人がおられませんので、推測になりますが、ただ田中先生からはほとんど毎日お電話をいただいておりますので、私の理解に間違いがなければこうお考えであろうという点を申し上げます。田中先生も今後とも続けられるのであれば男系男子に越したことはないとお考えですが、一夫一婦制のもとでは女帝を認めるほか無く、その女帝が一般男子と結婚されたら女系を認めるほか無い。ただし、『大宝令』には、女帝のお相手は四世以内の皇親でなければならぬとありますから、皇室と血のつながりがはっきりしている皇別の方々をお

迎えることによっており、今後もそういう方々が皇婿となれることが期待されます。そういう意味で田中先生も、やむをえぬ場合には女帝も女系も認めねばならないとお考えであることは間違いありません。

そこで、よく考えなければならないのは、万世一系とは何かということですが、田中先生の先輩の村尾次郎先生も明確に答えを示しておられます。村尾先生は『よみがえる日本の心』という著書（日本教文社）の中で、万世一系とは「天皇の御位が必ず皇族の籍を有せられる方によって継承され、皇族以外の他姓の者に皇位が移されたことが絶対に無いと言う意味」であると述べられております。男系とか女系とかではなく、皇族の籍にあられる方が受け継いでこられたことが重要なのです。

ご承知の通り、奈良時代に和氣清麻呂が道鏡事件に際して、宇佐大神の託宣をうけ、「我が国家、開闢より以来、君臣の分定まれり。臣を以て君となすこと、いまだあらざるなり。」と申しました。天皇の位を継がれるのは皇族の方のみであって、臣下が凱観してはならないということです。天皇の血統を引く皇胤であっても、皇族の籍がなければ皇位の継承者たりえない、ということが重要なのです。元宮家の方々に皇位継承権が無いのは、皇族の身分を離れておられるからです。もちろん、占領下においてやむなく臣籍降下せしめられた方々は、講和独立直後に復籍しておれば、ほとんど問題ないと思います。しかし半世紀以上もたった今日、一般国民として生まれ育った方々を皇籍に復帰せしめるのは、君臣の分を乱す

ことになるかと思われます。」

百地

「わかりました。もう一点はGHQの圧力による臣籍降下のことです。臣籍降下された方の復籍ですが、即位の例としては宇多天皇がおられます。また醍醐天皇も宇多天皇が臣籍降下されていた時のお子さまでから臣籍から皇族そして天皇になられた方にあたられると思われます。これに対し、GHQの圧力による臣籍降下ですが、GHQの巧妙な圧力の前に当時の加藤進宮内次官は臣籍降下やむなしの判断をされました。その時に鈴木貫太郎元首相は「もし直宮様だけで皇統が絶えた場合はどうなるのか」と質問されています。それに対して加藤次官は「かつての皇族の中に社会的に尊敬される人がおり、それを国民が認めるならその人が皇位についてはどうでしょうか。しかし、適任の方がおられなければ、それは天が皇室を不要と判断されるでしょう。」と答えています。また「従来の皇室典範に照らして皇位継承権を持つておられる方々ですから、宮内庁といたしましてもそれ相応の品位を保つことができますよう最大限の援助をさせていただきます。万が一にも皇位を継ぐべき時が来るかもしれないとの御自覚のもとで身をお慎みになっていただきたい」と申されています。このエピソードは高橋先生も『天皇家の密使たち』で紹介されています。このような事実をもとに考えれば、GHQの圧力によってなされた臣籍降下は特別のものであって、旧皇族やその男系子孫の方々の皇籍復帰は例外として認めてもよいのではないかと。いかがでしょうか。」

高橋

「私の本に関連しまして、お答えします。GHQの圧力は間違いなくありました。一九四六年には皇室財産が凍結されました。GHQは日本の民主化の為に皇室を何とかしようとしていました。また、日本政府も皇室をお守りする為に小さい皇室にしようとしていました。加藤さんがそのように申したのは事実です。一方で入江相政さんは日記で、戦前の皇族は多かった、と書いています。入江さんは昭和九年から侍従をしていますから厳しい目で見ています。そして、「今回のことはお気の毒だが、果たして皇族の方々の中で皇室の為に役に立った方はどの程度あったであろうか。(二三の例外を除いて。)」とも書いています。戦前のああいう時代でも旧皇族への批判もあったのではないかと存じます。そこで逆にどういう手続で旧皇族の方々を復帰させるのかをお聞きしたいのです。国民感情が許す方法論は無いのではないかと思います。」

「私は占領下の厳しい事情は充分に考慮するべきだと思います。そのような状況から回復すべきであったと思います。ただし、それは昭和二十七年か三十年ころまでにすべきでした。なぜ政治家も有識者もあの頃に日本の主体性を回復する努力を懸命にされなかったのかを残念に思います。しかし、それがほとんどなされずに五十年以上経った現実を直視しなければなりません。人間の歴史はせいぜい百年であり、世代としては三十年です。そもそも、将来皇位を継がなければならぬいかもしれないとの心構えで生活されるのと、やがて成人し

結婚すれば皇族身分を離れることが決まっているのでは、そのお育ち方が大きく違います。よって、旧皇族のご子孫がどれほど優秀であっても、これから皇族に戻られるのは相当困難だと思います。

実は一昨日、八木秀次さん・長谷川三千子さんと『諸君』一月号の為に鼎談をしました。その時、八木さんに「旧皇族の方々をどのように復帰させるのか」を質問しましたところ、ちょっと答えに窮されて「原則全員」だけれども、実は全員といかないので、辞退を申し出る方には辞退していただくとお答えでした。そこで「誰がどのように判断されるのですか」と重ねて質問しましたら、お答えがありませんでした。

そこに大きな混乱が起きる恐れがあります。全員復帰は経済的にも困難ですが、その一部を選ぶ場合、おそらく辞退されるような方こそ復帰されるのにふさわしいとか、逆に名乗りを挙げるような方はどうかは判断に迷うところです。確かに旧皇族のご子孫にも立派な方はおられますでしょうが、どの方を誰が適任と考えるのか、また仮に決まっても広く一般の合意がえられるのか、なかなか難しい問題です。しかも、それ以上に重大なことは、これが君臣の分を乱す要因になる恐れがあり、断じて避けたほうがよろしいかと存じます。

念のため宇多天皇と醍醐天皇に関しては、私の専門に近いことです。簡単に申し上げます。宇多天皇が光孝天皇の皇子でありながら三年ほど臣籍降下されたのは、藤原氏への大変な遠慮からです。しかし、父君晩年の強い御意思により復籍して即位をされました。次の醍醐天皇は、宇多天皇が臣



籍降下されてしまったわずかな期間にお生まれになりましたが、父君の即位に伴って親王となられ、立太子もされています。宇多天皇は菅原道真と相談され数名の皇子の中から皇太子をお選びになられたのです。宇多天皇の臣籍降下自体が藤原氏の圧迫によりやむなくされたことですから、先例とするには当たりません。」

「百地先生の父系社会に関して申し上げたいと思います。戸田貞三先生や有賀喜左衛門以来の農村社会学では同族に異姓を含む点が日本の家制度の特長であるとしており、日本を父系社会と見ることは否定されています。今日では双系制社会と見る方が自然だと思えます。また第一子相続は姉家督と申しまして山形県などが強いのですが、これも日本が純粹な父系社会ではないことを示していると思えます。その中で皇統に関しては、前近代にあってはどうやら父系原理で貫かれていたようです。養子については、近世なり明治になって制度が固まる以前は参考にする余地が無いかもしれませんが、幕末の皇室では御猶子が見られます。この二点に関してお聞きしたかったところです。」

高橋

「有識者会議が素人の集まりであるという批判、もっと時間をかけよという批判があります。これがよくわかりません。笹山さん、園部さん、古川さんは素人とは思えません。その他の方々に關してですが、むしろ素人の方がそれなりの議論をされるのではないのでしょうか。古川さんもあまり言われて

いませんが、「榮典制度の在り方に関する懇談会」で座長としてきちんととりまとめており、造詣が深い方です。むしろ一〇人全員が専門家だったら結論が出ないと思います。時間をかけるとのことですが、なぜでしょうか。現在の皇室典範のままですと、皇室だけでなく宮家もなくなってしまう。一〇年前ぐらいからこのような議論はしています。法の体系に問題があるのに放置しておくのは、国家として形が整っていないということになり、おかしい話です。」

所

「葦津珍彦先生や大石義雄先生が昭和の終り近くに『現行皇室法の批判的研究』という力作を纏められています。しかし、それ以外に皇室法や皇室典範を他の人たちがどれほど研究されていたでしょうか。私も今の改正案が完全とは思いません。しかし、さらに工夫すれば、より良い改正もできます。今は敬宮愛子様お一人ですが、もし他に男子がお生まれになれば男系の男子が確保されます。そこで私と高橋先生の違いは、男子継承の可能性を残しておくべきだということです。」

百地

「父系社会に関しては一般論で申し上げました。今の社会でもそういう風習は残っているであろうと思います。したがって例えば女系が続けばどの家につながっているのかわからなくなります。」

それから素人云々の話に関して一言申し上げます。週刊誌情報で恐縮ですが、有識者会議に無欠席で参加しているのは座長と座長代理他数人のみとのことで、意見を述べない人も

いたようです。一七回のうち、緒方貞子さんは六回、佐々木毅さんは三回、奥田碩さんも欠席があります。中心は吉川さん、園部さん、古川さんです。まず有識者とは何か。知識以上に、知恵や良識、何より歴史に対する怖れのようなものをもっている方でなければこの問題には関わっていただきたくありません。その点、古川さんは皇室に対する怖れや歴史に対する謙虚な気持ちは持っておられない方です。園部さんも判事を辞められてから皇室のことを研究なされているわけです。『皇室法概論』という本を出しておられますが、資料的には纏められているものの、論理や分析には問題があります。

国事行為の分類にしても学界の通説や判例とは相当違っています。ついでに、園部さんは外国人参政権問題で判決を出されましたが、本論の中では外国人に参政権を与えることとはできないとの論理を展開しているが傍論では与えよというようなどんでもない議論を展開している方です。これは矛盾であると私は批判してきました。朝鮮人への強制連行など存在しないとの事実が確定しているのに、思い込みによる同情によって判決を書くような方です。愛媛玉串料裁判でも、目的効果基準など基準ではないとおっしゃいました。が、四年前には目的効果基準によって判決を下しています。もうひとつ、私、比較憲法学会で裁判員制度に関して質問したことがあります。その時は園部さんは裁判員制度を合憲だとおっしゃっていました。ところがその後で開かれた懇親会では、「あなたの議論は正論だが、スタートしたんだから仕方が無いでしょう」などとおっしゃいました。そういうことを平気でおっしゃ

る方です。古川さんは靖国神社に批判的で無宗教の追悼施設を推進しているような方です。村山談話も高く評価しています。彼は官房副長官時代に当時の橋本首相に皇室典範改正問題を進言していますが、この方が色々動き回って報告書をまとめたのではないか。しかしこういう方々が取り纏めた報告書を本当に有識者の意見と考えてよいのか、疑問は残ります。

また、時間をかけるべきか急ぐべきかという問題ですが、これは論点により区別すべきかと思います。時間をかけるべきは女系を採用するかどうかです。所先生も男子がお生まれになればその方がお継ぎになるべきであるとおっしゃりながら、女系は急げとおっしゃる。これは矛盾ではないでしょうか。急ぐべきは宮家の問題です。それこそ年頃の女王や内親王様がたくさんいらっしゃいますから、そこに旧皇族の方々が養子に行かれればすぐに解決します。皇室典範その他の不備は、私も大嘗祭裁判を支援してまいりましたから、痛いほどわかっております。」

所 朝日新聞の編集委員で宮内記者の岩井克己さんが『週刊朝日』の十一月十七日号に論文を寄せています。これは、百地先生と同じように、女性天皇が続くと姓がぐちゃぐちゃになると言われるのですが、そうではありません。

そもそも日本には中国のような父系血統を絶対視する「宗族」制度がなく、もちろん皇室には姓がありません。日本では氏族の家柄を示し家名も表す氏の名を氏姓とか姓というようになりませんが、その多くは本来、天皇から賜るものであっ

て、主体の皇室には家名ありません。日本に易姓革命が無いことを聞いて、中国（宋）の皇帝もびっくりしています。大事なのは、天皇になられた方を中心に家系をつないでいくわけですから、その意味で男系も女系も関係ありません。姓が無いのですから、移りようがありません。父方の姓を名乗ることなど、ありえない訳です。

ちなみに、一般の家でも、女性が他家から男性を婿養子に迎えても、その家の姓（家名・苗字）を継ぐわけで、男性の生家の姓を継ぐではありません。まして一般から皇室に入られる方は、もちろん姓がなくなります。

今もって残念なのは、もし典範の改正を早く行っておれば、清子内親王が結婚されても黒田姓になるのではなく、黒田慶樹さんが入夫として皇族になることができたわけです。今すべきは旧皇族の復活ではなく、女性宮家を創設して、その子孫にも皇族を増やしていくことだと思います。」

藤森

「議論はますます深まっていますが、時間を大幅にオーバーしております。事前に集めましたフロアからの質問に關しましては、今までの議論で先生方はお答えになっていると思われまゝ。この問題は大変難しく、簡単に結論が出せない問題ではあります。今後とも議論を継続していかなくてはと思っています。先生方、皆様、長い時間ありがとうございました。」

《補遺》 二〇〇五年 日本政教研究所 秋期シンポジウム

『皇位継承をめぐって』の事前と事後

日本政教研究所の主催による二〇〇五年秋期シンポジウム『皇位継承をめぐって』は、シンポジウム・アンケート調査の結果に示されておりますように、時宜的に極めてタイムリーな企画となりました。お陰様にて、シンポジウム終了後も各パネリストの先生方への讃辞は勿論のこと、パネリストとフロアー間の白熱した質疑応答および藤森馨教授の手際の良い司会進行に對しまして、ご参加頂きました大方の評価を頂くことが出来ました。本シンポジウムを企画・構成した一研究員として、大変嬉しく存じますとともに、開催にあたりご支援頂きました本学教職員の方々に厚く御礼を申し上げます。

さて、本研究所が二〇〇五年秋期シンポジウムで取りあげました『皇位継承』につきましては、同時期に政府有識者会議の検討事項であったこと（および同会議の最終報告書提出時期と重なったこともプラスになって）、日本国民は勿論のこと世界の国々からも最大の関心をもって注目された事項でした。現にドイツ・ベルリンからジャーナリストのヨルク・ウヴェ・アルヴック（JÖRG-UWE ALBIG）さんが本研究所への取材申込をされました。このように学内外の多くの方々に、秋期シ

ンポジウム開催前から高い関心を持って頂くことが出来ました。またシンポジウムの構成も、一方的な意見や主張に片寄らず、それぞれのパネリストの先生方がご自分の考えを明確に主張されました。したがって、多くの参加者の方々には、意見（学説）の違い、天皇制や皇位継承に関する知識の吸収という意味で満足して頂けたようです。テーマ選定、パネリスト選出、シンポジウムの質的内容、企画・構成のバランスなどを総合的に勘案して、皆様方の及第点を頂けると研究員一同、自負致しております。

ところで、世間では『皇位継承』の問題はシンポジウム終了後も終わることなく、大きな国民的関心事として平成一八年へと持ち越されました。なかでも女系天皇容認に早くから異論を唱えられている寛仁親王殿下は、昨年に引き続き一月一日日発売の月刊『文芸春秋』二月号において、男系維持の必要性和旧皇族の復帰を示されました。結論としては、「血統に対する暗黙の了解、尊崇の念」を下に、「これまで皇統を維持するために先人がどんな方策を取ってきたかという事実をよく考え、さまざまな選択肢があると認識し、物事を決めて

欲しい」という内容でした。これは小泉純一郎首相の諮問を受けた「皇室典範に関する有識者会議・吉川弘之座長」への正面からの批判であり、余りにも同会議の結論は拙速に過ぎるという殿下のギリギリの御発言でありました。

マスコミの取りあげも方も日に日にヒートアップする中で、政府・与党内で「慎重論」から「見送り論」へと流れが生じ始めたにも係わらず、小泉首相は党議拘束を以てしても、今通常国会に女性・女系天皇を認める皇室典範改正案提出を図ると発言しました。一月二十六日、与野党の国対委員長が相次いで、皇室典範改正案の審議・提出に慎重な姿勢を表明する中で、小泉首相のみが国会での改正案成立を強調しました。

二月一日、超党派の保守系議員でつくる日本会議国会議員懇談会などが「皇室典範の拙速な改定に反対する緊急集会」（憲政記念館）を開催し、趣旨に賛同する一七三人の国会議員の署名を発表しました。小泉首相の強行発言が伝わる中で、党内分裂の危機も指摘されはじめたとき、二月七日、羽田信吾宮内庁長官は「秋篠宮妃紀子さまにご懐妊の兆候がみられる」と発表しました。この発表を受けて、皇室に御慶事が生じた以上、皇室典範改正は急ぐべきものではないという慎重論に大きく移行し、また国論を二分することのリスク回避が説得力を有してきました。二月八日、小泉首相は衆議院予算委員会において、従来の考えを修正し、慎重に取り組むことを表明しました。また自民党内では、今国会での皇室典範改正はもはや困難との意見も出され、事実上の改正見送りが示唆されていました。そして、二月九日、小泉首相が皇室典

範改正案の今国会提出を断念したことが報じられました。

振り返ってみますと、宮内庁が皇位継承に関する資料作成を開始したのが平成八年頃と言われております。政府関係者間で足掛け一〇年余り非公式に準備し、平成一六年一二月に有識者会議を発足し、その会議をして報告書の提出を求め、皇位継承に関する政府としての方針を決定しようとしたものと思われまます。しかしながら、同会議の開催回数、延べの審議時間数、審議委員の出席状況などを知るにおいて、僅か半年余りで結論を出そうとしたことは拙速の批判をやはり否めません。また同会議が発足する七ヶ月も前に（平成一六年五月）、政府の非公式検討会が女性・女系天皇を認めるための法改正を想定していたという事が事実ならば（平成一八年二月一七日・産経新聞朝刊）、極めて問題であると言わざるをえません。まず結論ありきとして、一部の政府役人・官僚が皇位継承の取扱を自分達で意図し、小泉首相にこれを進言し、有識者会議を発足させ、この機関によりオーソライズさせ、世論誘導を図ったと考えられるからです。しかしながら、彼らの謀は「秋篠宮妃紀子さまご懐妊」という事実の前に、ものの見事に粉碎されたと思われまます。またこれにより、国論は収まり、天皇および皇室に対する国民の意識および関心が再びアップされたようにも思われまます。

なお最後に、この『政教研紀要』第二八号に掲載しました「二〇〇五年秋期シンポジウム『皇位継承をめぐる』」に関する文責は、国士館大学 日本政教研究所 編集委員に全てあることを予めお断りをさせていただきます。

（編集委員：吉川 智）

二〇〇五年 日本政教研究所 秋期シンポジウム

アンケート調査結果

開催日時…平成一七年一月一九日(土曜日)午後二時より
開催場所…国士館大学(世田谷)一〇号館(三階)一〇三二九

教室

開催テーマ…「皇位継承をめぐる」

参加者数…延べ人数一二五名

アンケート回答者数…四七名(三七・六%)

アンケート調査結果

一…年代をお伺い致します。

① 一〇代	一名
② 二〇代	九名
③ 三〇代	七名
④ 四〇代	九名
⑤ 五〇代	七名
⑥ 六〇代	八名
⑦ 七〇代以上	六名

二…性別をお伺い致します。

① 女性	六名
② 男性	四一名

三…国士館大学日本政教研究所をご存知でしたか。

① 知っていた	一九名
② 知らなかった	二八名

四…今日のシンポジウムを何で知りになりましたか。

① 新聞折込広告	七名
② チラシ	一五名
③ 知人等の紹介	一一名
④ 大学のホームページ	三名
⑤ その他	一〇名
(メール：授業での紹介)	

五…今回のテーマについて、いかがでしたか？感想をお聞かせください。質問でも構いません。

- もっと以前に開くべき。数回続けるべき。
- 時宜を得たテーマだと思います。大いに参考になりました。
- とっても良いと思います。
- 皇位継承については非常に興味がある。
- 著名なパネリストで、大変参考になりました。
- 月曜日の発表を前に、時宜的に良いテーマだったのではないだろうか。
- 今日の最も重要な問題に関するテーマであり、良かった。
- 有識者会議だけではなく、各メディアによる興味本位の報道、愛子内親王の人気等、皇室問題に関して国民意識は高まりつつあり、そのことを背景にしたテーマで、意義深いと思う。
- ちょうど個人的に関心を抱いていましたので、参考になりました。
- 有識者会議の二日前の発表の今は、時宜を得たテーマでした。大変勉強になりました。
- はじめ皇族問題についてまったく知識がなく、とても自分とは遠い話題で関係のない事のように思っていました。しかし、シンポジウムに参加してみても、私は一人の日本国民であり、これから社会人になる上で、このような日本全体の問題についてもっと興味関心を持っていかなければならないと感じました。
- 差し迫った問題で、出来るだけ早く結論を出すべきだと思いますので、非常に関心があります。
- 熱い議論が交わされて、大変に良かった。
- 国士舘大学の取組ということですので、非常に興味深く、本会を楽しみにして参りました。構成のバランスが良く、偏りのない仕上がりになっていたと思いました。真に有意義な時間を過ごさせて頂きました。
- とても難しい（正解のない）テーマです。各先生方の見解もすべて異なり、改めて難しい問題だと知りました。
- 天皇制そのものが良く理解できました。
- 日本の将来を運命づける重要な問題であり、現情勢のみに流されることなく、日本の伝統や精神を正しく継承する事において、日本の運命を左右しますので、大いに議論をする必要があると思います。日本人の心の支えとなる尊敬される天皇制を存続させるためにはどうするべきか。結論を早める必要はないと思う。
- 時宜に適い、大変に良い。片寄らない発表者を揃えられたことは、結構に思います。
- 政府有識者会議の答申案について、疑念、独善的と感じているので、このシンポジウムは大変に貴重と思い、参加しました。大いに議論すべきで、軽々に答申案を容認すべきではない。
- 日本の伝統・文化なりを考えると、天皇制を別にするわけにはいかないと思います。現在、男子の継承者が不在のとき、女性天皇を議論することは重要と思います。
- 皇室典範問題は、もっと議論を重ねて欲しいです。私は、男系男子に固執したいと思います。旧皇族を復

活するべきで、女性（婿）として迎えるべきと思います。

○ 皇位継承に関する基礎知識がなかったが、何が問題点なのか少し理解できるようになった。

○ 良い。今後も続けて「皇位継承をめぐるパートⅡ、パートⅢ・・・」して欲しい。いろいろな考え方が必要である。

○ 日本社会が抱える時事問題で、国民が持つ関心度も高く、週末の貴重な（私の）時間を惜しむことなく参加できました。

六…どのパネリストのお話に一番関心を持たれましたか？

① 嵐 義人 先生 …………… 一〇人

② 高橋 紘 先生 …………… 一人

③ 百地 章 先生 …………… 三三人

④ 所 功 先生 …………… 二二人

⑤ 藤森 馨 先生 …………… 九人

七…シンポジウム全体の運営についてはいかがでしたか？
また、その理由も簡単にお答えください。

① 非常に良い …………… 二人

② 良い …………… 一六人

③ ふつう …………… 一三人

④ 悪い …………… 〇人

⑤ 非常に悪い …………… 〇人

【批判的理由】

○ なぜ無料なのか不思議だ。

○ 第一部での発表時間に対し、いささか注意するべきではなかったのだろうか。司会者の介入がもっとあっても良い。

○ 部屋が少し涼しかったです。

○ 嵐先生の早退は残念でした（質問を残した）。

○ もっと学生が参加しやすい運営の仕方をして欲しいです。

○ パネリスト全員にワイヤレスマイクを用意して頂きたい。極めて有意義かつ時宜を得たシンポジウムを、もっと多くの方々に聴いてもらうべきであったと思います。

○ 相應しい会場が必要（希望）

○ 時間をもう少し早めて、討論を長めに取ってもらうと良いです。

○ ディスカッションの時間が充分でなかったのが残念。

○ 通路に設けられたコーヒープレイク場：大人数が利用するには余りにも狭いのでは。

○ 黒板に掲示されたレジュメが極めて小さく、目視不可能。
○ 当シンポジウムに対する広報力の弱さ。

【好意的理由】

○ 実りある内容でした。

○ 資料が充実していた。

○ パネリストのレジュメがある（充実している）のが素晴らしい。

○ 資料も豊富かつ珍しいものがあったのが良い。

○ 各パネリストが良く意見を発表され、その意味が分か

りました。

○ 第一部・第二部構成にしていたのは良かった。

○ パネリストのバランスがとれている。

○ 高橋先生の有識者会議の内容が、詳しく聞けて良かった。

○ 議論の盛り上がりがあり、良く理解できました。

○ コーディネータによる進行がとても良かった。

○ コーヒー・お茶等の接待、有難うございました。

○ 全体的に良かったです。

○ いろいろと違う立場の方々に参加して頂いたこと。

○ 事前に論者の主張が示されていて、論旨を直接に聴取でき、分かりやすかった。

○ 両論・公平に発表。

○ 立場の違う先生方で、面白かった。

○ 時間がオーバーしてしまっただが、全体的にスムーズに流れて良かった。

○ お茶とお菓子は有り難いと思いました。

○ コーヒブレイクタイムもあり、シンポジウムに参加していた人達と話し合いも出来たのが良かった。

○ パネリストの報告が短めであったのが良い。

【その他】

○ 可も不可もない。

○ シンポジウムというものが初めてなので、比べようがない。

八…会場はいかがでしたか？

① 非常に良い……………七人

② 良い……………一四人

③ ふつう……………二〇人

④ 悪い……………五人

⑤ 非常に悪い……………〇人

【ご意見】

○ もう少し整った設備の場所でも良かったのでは。

○ 大きさが手頃で、パネリストの顔が近いのが良かった。

○ 会場内が暑かった。

○ パネリストの顔が見えない場所があった。

○ 後ろの席で、少し音声が聞き取れない面があった。

○ もう少し落ち着いた会場（部屋）が良かったのではないかな。

○ パネリストが座って話をされるので、見づらかった。

○ 登壇者の名札をもう少し大きくして欲しかった。

○ 椅子が長時間シンポジウムを行うには、座っているのが辛かった。

○ 椅子が堅い。長時間座るのは如何か。

○ 椅子が動くので、落ち着かない。

○ とくに後半、壇上が狭く、先生方にはお気の毒だった。

○ 椅子の座り心地が悪い。

九…大学がこのようなシンポジウムを開催することをどう思われますか？またご意見があれば、お書きください。

① 非常に良い……………三二人

- ② 良い……………一六人
 ③ ふつう……………〇人
 ④ 悪い……………〇人
 ⑤ 非常に悪い……………〇人

【ご意見】

- 大学の大学たる所以は、こういうところにその一端があると思います。
 ○ とても充実した内容ですから、引き続き企画して頂ければと思います。
 ○ よく目に触れるので、学生の関心も引きやすいのでは。
 ○ 講演会と異なり、対立意見を同時に聴けたのと、ディスカッションが勉強になりました。
 ○ 私もそうでしたが、学生は社会や国のこの様な問題について、興味と関心が薄い。なので、大学が開催することとは良いことと思います。
 ○ 今回のように、一般にも公開して頂けると国民の関心も深くなると思います。
 ○ 時局に対応したシンポジウムを次回も期待しております。
 ○ 有難い。とっても意義深いと思います。
 ○ 大学は、専門の良い先生がたくさんおり、日本・地域のリーダーであるべきです。シンポジウムで、その時の問題を話し合い知ることは、これからの日本にとり、とても大切だと思います。
 ○ 学外的一般人も参加できたことが良かった。今後お願いしたい。

- 時宜に適した良いテーマでした。
 ○ 学生の参加が、これから期待されるのでは。
 ○ 人の意見を聞くことは個人の考えや視野を広げるきっかけになるので、もっと大々的に開催するべき。
 ○ 皇位継承に関する基礎知識が国民に共有される中で、本シンポジウムは有意義でした。
 ○ 今後も可能な限りシンポジウムを開催して頂けると有難く、大いに期待しています。
 ○ 興味・関心を以前から持っていた反面、一般市民の立場からは非常に遠くにある問題であり、私自身の知識の薄さに気付かされました。シンポジウムを通じて得た様々な意見は、貴重な財産であると同時に、一層深くこの課題を考えるきっかけになりました。
 ○ 国の基礎になることなので、しっかりと受け止めて一般の私達にも知らせて欲しいです。
 一〇…また開催して欲しいテーマはありますか？（日本政教研究所の主催のものでなくても結構です）
 ○ 天皇と日本人との関係。天皇とは。
 ○ 中韓「高句麗」歴史帰属紛争と満州問題。
 ○ イスラームから見たポスト近代の共同体論への見通し。
 ○ 憲法改正について。
 ○ 男女共同参画社会。ジェンダーフリー問題。ジェンダーフリーは、教育の現場における影響が多く、それを大学で開催し、一般の方や学生の参加もあると良いと思います。

す。夫婦別姓、少子化など、様々なテーマとも絡めて欲しいと思います。

○ 皇室の在り方。「開かれた皇室」は本来に必要なか。

○ 国際経済について、お話を伺えたらと思います。

○ 現代史に関するテーマ。

○ 靖国神社と新しい戦没者慰霊施設設立に関するシンポジウム。

○ 政府・行政・地方行政の今後の在り方。国家の財政赤字。少子高齢社会。

○ 首相の靖国神社参拝問題。教育基本法改正と教科書問題。

○ 国際政治（領土問題・人権問題・軍事問題）における日本の立場や今後の動向について。

○ 北朝鮮の核問題について。

○ 旧日本軍が中国で遺棄したとされる化学兵器の問題について。

○ 日本の古代史について。

○ 世界文化遺産に関する総合的な検討。

○ 大東亜戦争の歴史的真相。

○ 皇室論・国家論について。

○ 政教関係

一：次回このようなシンポジウムがある場合、参加していただけますか？

① 必ずする……………四人
② する……………三四人

③ しない……………○人
④ 絶対にしない……………○人
⑤ わからない……………六人（テーマによる）

一二：ご自由なご意見をお聞かせください。

○ ずいぶん前にこのようなシンポジウムに参加したことがあります。一人の先生がじっくり話してくださるので、とても分かりやすく、良かったです。そういう形にして欲しい。

○ 前置きが長い。簡潔に言えることをくどくど言う人が多い。

○ 種々の意見の違う方が議論されて、大変有意義でした。
○ 女系・女性天皇賛成・反対の人々を交えてのシンポジウムは面白かった。自分がある立場に立つと、収集する情報も片寄ってしまう。反対の意見も聴けるのは貴重だった。

○ 皇室典範改正については、養子制度の承認のみに限り、女性・女系などについては言及しないのが良いと思われる。

○ 歴史、現状、将来性など、分かりやすく区分すると良いと思います。先生方の意見の交換もあればいいと思います。女帝・女系の話をするならば、女性のパネリストこそ必要なのでは？

○ 各方面の広くて多面的なお話をお伺いできる機会を作って頂き、有難うございました。

○ 私は、女帝容認・長子優先に賛成です（承継予定の皇

族に、男子優先のプレッシャーを与えないために)。

○ こうした企画をもっと開催して頂きたい。また告知の方法を広げてください。

○ 本来、大学は国家・社会の各界のリーダーを育成する機関であります。わが国の将来に涉る大きな問題について、シンポジウムを主催されて、研究者の考え知見を発表し、多くの人々に学ぶ場を提供されることは、貴大学の良識の現れと思いました。今後とも、このような機会をお作り頂きますよう希望致しております。

○ 日本政教研究所のシンポジウムには、二回目の参加ですが、次回も参加したいです。ハガキなど、連絡方法も作ってください。

○ 天皇制廃止論者に力を与えないような天皇制の存続を考えるべきである。

○ 久しぶりに良いシンポジウムに参加でき、貴重な時間を与えられた。是非、本日の記録を活字にされ、早急に世評に問うべきである。

○ 天皇の役割を祭政一致と言えるものが有るということですが、現在は天皇は国事行為だけで、政治(統治)には関わりがないはず。愛国心・軍事力など復古的な風潮の中で、戦前の天皇に返ることのないようにしたい。神でも君主でもない。戦前の帝国憲法でも、天皇に責任をとるような事のないように、普通選挙や政党政治も行われていた(昭和一〇年代は逸脱だった)。憲法にある象徴天皇の意味を大切にしたい。帝王学などを問題にしてい

るのは、統治者を予想しているかと心配である。

○ 資料が沢山あって、素晴らしい。ファイルに「国土館」名を入れたらどうか。

○ 一月一八日(金曜日)に頂いたチラシで初めて本シンポジウムについて知りましたが、出来ればインターネットの「チャンネル桜」や「東京講演会情報」などに情報を載せて、告知して頂ければ幸いです。

○ 参加できて良かったと思いました。

○ パネリストの発言に対する聴衆の関心度や反応を細かく観察して、進行を行ってくださった藤森先生に感謝。次回も是非参加させていただきます。

○ 気楽な気持ちで参加したつもりでしたが、非常に程度の高い講演に参加できて嬉しく思っております。勉強する機会が少ないときに、時宜を得た問題に取り組まれ、勉強させて頂き本当に有難うございました。外国よりとやかく言われていることに対しても、日本人として「毅然」とした対応が出来るよう若者をしっかりと指導して頂きたい。私達は、もう先がありませんので、日本の行く末を案じております。本日は、本当に有難うございました。